

△余滴▽

## 「音声表現くゆたかな朗読を求めて」 と東海・音声表現研究会

高野 春 廣

「音声表現くゆたかな朗読を求めて」第3号の編集に、今、追われています。この論集と同じ2008年春刊行の予定です。A5約100ページ、10数本の論文・読み物とCD（俳優の朗読と朗読法）、1冊1000円。

編集・発行は、東海・音声表現研究会。代表は俳優の舟木淳さんと私・高野なので、本稿でこの小冊子と研究会について紹介・宣伝をしたいと思います。

日本語ブーム、音読ブームにのって、「声に出して読む」とか「朗読」とか、この分野の単行本は数多く出版されるようになりました。が、本格的な内容の定期刊行物という全国的にもあまり例がありません。そのせいか第1号、第2号ともに実売1000冊を超えるほどの、手ごたえがありました。特に第1号は、初版1000冊が瞬く間になくなり、急いで500冊増刷という一幕もありました。東海地方に留まらず、東京などでもかなりの読者が生まれ、アマゾンを通しての注文もいくつかりました。それだけ音声表現・朗読に興味を持つ人たちが広がってきているのでしょうか。

第1号・創刊号は、去年・2007年3月1日、第2号は去年10月1日、そして第3号が今年春発行予定と当初計画の年2回刊を順調に進めてきています。

内容は、「科学的朗読法」、「共通語の発音・アクセント考」、「音声表現の基本・プロミネンス」、「『ぜんぜん』から考えた」、「日本語で使われるモンゴル語」などの論文・論考、「女優・田中幸子さんに聞く」、「俳優・藤城先生に聞く」などプロの朗読家へのインタビュー、「絵本に出会えてよかった」、「音訳に携わって」、「赤ちゃんから読み聞かせをはじめましょう」、「私の音声表現への取り組み」、「私の朗読『無茶』修行」などの体験談、「かっぱかっぱらったかい」、「たのしい朗読」、「鈴鹿麦わら帽子の会」など朗読サークルの紹介、「朗読本を観る」という書評シリーズ、等々硬軟とりまぜた雑誌風のものとなっています。

CD付というのが最大の特徴です。「音声表現」なのだから声も届けなければ、ということでも毎号「プロの朗読」と「声のテキスト」をCDに収録し、冊子に添付しています。CDだけでも「1000円」の値打ち」は十分あるということも実売数を伸ばしている要因のようです。

正直、完売しても採算はぎりぎり。手作りやボランティアを活用して予算を切り詰めてはいるものの、台所は厳しい。でも、この小冊子が、朗読、読み聞かせ、アナウンス、語り、ストーリーテリングなどいわゆる「音声表現」についての意見交換の場になったり、興味を持つきっかけになったりするのならば、という思いで、当分は年2回のペースで発行し続けたいと思っています。

この「音声表現」の産みの親、東海・音声表現研究会は、2000年秋に発足しました。

当時、俳優の舟木淳さんと私は、ちょうど同じ時間帯に知多美浜にある日本福祉大の非常勤講師をしていました。講師控え室や往復の名鉄電車の中で、「音声表現について理論的に深めていきたい」、「朗読法のメソッドをまとめてみたい」などよく話し合っていたのでした。

「じゃあ、研究会でもやってみる？」ということ、二人の周りの人

とともに準備会を結成。次のような「お誘い」の文章をつくり、広く呼びかけました。会は、今もこの考え方で運営されています。

東海・音声表現研究会へのお誘い

俳優、アナウンサー、研究者、教師、主婦、学生ら、朗読・アナウンス・読み聞かせなど「音声表現」に興味を持っている人たちによって、「東海・音声表現研究会」をつくりました。

例会は、月一回。

時間は、午後6時半～8時半。

会場は、名古屋市女性会館。(地下鉄・東別院下車 徒歩五分)  
会費は、月5000円。

例会ごとに、テーマ・報告者を決め、話し合う。

当面の役員は、世話人代表―舟木淳、高野春廣の二人。会計―北里真弓。

十月に集まってくださった14人で、以上のことを決めました。

朗読、アナウンスのプロやセミプロ、単なる愛好者、これから勉強したい人など参加者はさまざまです。なかには話を聴いているだけで満足！2次会が楽しみ！という人もいます。ちょっと覗いてみてください。

第一回の例会は2000年11月21日。以来ほぼ毎月開いてきました。(現在は原則として毎月の第一火曜日)

テーマは、朗読、群読、読み聞かせ、ストーリーテリング、アナウンスなどについて、報告者それぞれの関心・視点から論じたものやアクセント、抑揚、セリフ、方言など表現技術・表現方法をめぐってのものなど多岐にわたっています。

報告の内容・仕方は、研究会らしい「論文的」なものやビデオ・CDを視聴しながらの「鑑賞会的」なもの、朗読や表現をテーマに出版

「音声表現くゆたかな朗読を求めて」と東海・音声表現研究会

された本の「書評論的」なものなどさまざまです。なかには例会席上で朗読したり踊ったりする「実演的」なものもありました。

例会の出席者は、毎月10人～20人。会員は、年に一回以上出席する人が50人弱。

この7年間に一回でも出席した人を数え上げればおそらく1000人は超えるだろうと思います。「お誘い」にありますように、朗読・アナウンスのプロやセミプロ、研究者、教師、学生、朗読愛好者(聴くのが好きという人も)などいろいろな人たちが集っています。

こうした「東海・音声表現研究会」の例会・話し合いを土台にして、『音声表現くゆたかな朗読を求めて』の原稿の多くが執筆されています。

2000年11月の第1回例会から、2007年12月までの例会のテーマを付記します。こんななら一度覗いてみようという方、大歓迎です。

東海・音声表現研究会 例会の歩み

- 1、「杉沢陽太郎『現代文の朗読術入門』をめぐって」
- 2、舟木淳「私の朗読術」
- 3、「朗読について」舟木報告を受けて」
- 4、「アクセントについて」
- 5、「朗読を学ぶ立場から」
- 6、「朗読・比較文化論」
- 7、「高野春廣『物語の楽しみ』をめぐって1」
- 8、「高野春廣『物語の楽しみ』をめぐって2」
- 9、「ゲーテの詩、朗読コンクールに出演して」
- 10、「読み聞かせについてのレポート」
- 11、「尾西での朗読・読み聞かせ」

- 12、「プロの読みとアマチュアの読み」
- 13、「『天草物語』を聞く」
- 14、「アクセント考」
- 15、「朗読「わすれられないおくりもの」
- 16、「人間ドキュメント・長岡輝子『裸の心を声にして』をみて」
- 17、「谷川俊太郎『詩ってなんだ』をめぐって」
- 18、「他人の本音を読む」
- 19、「読み聞かせ」
- 20、「朗読ボランティアのあり方」
- 21、「かっぱかっぱらったかい発表会から」
- 22、「私の朗読指導体験」
- 23、「朗読と演劇」
- 24、「朗読の楽しさ」
- 25、「ゲーテの詩朗読コンテスト」
- 26、「なごや弁について」
- 27、「昔話と方言」
- 28、「朗読9年」
- 29、「日本語教育から見た日本語の特色」
- 30、「春・朗読の一日」
- 31、「中国国際放送局日本語部」
- 32、「音としての日本語」
- 33、「朗読への思い」
- 34、「親へのメッセージ」
- 35、「鉄道アナウンス」
- 36、「民話を語る」
- 37、「日本語の発音再発見」
- 38、「天野有恒『自然な演技をめざして』をめぐって」
- 39、「音研・北京の旅」
- 40、「始めて人前で朗読」
- 41、「日本語の呼吸（鴨下信一）」
- 42、「昭和と平成のアクセント」
- 43、「マザーグースから学ぶ1」
- 44、「マザーグースから学ぶ2」
- 45、「源氏物語の朗読」
- 46、「表現」
- 47、「科学的朗読法」
- 48、「私の朗読・朗読指導」
- 49、「平成小学校の群読」
- 50、「春・朗読の一日」
- 51、「朗読再考」
- 52、「群読」
- 53、「万博の群読（一粒の種）」
- 54、「群読再考」
- 55、「学生の群読」
- 56、「放送コンテストの指導と審査」
- 57、「CD・愛知の民話」
- 58、「受賞記念・芸能生活50年」
- 59、「ラジオ（NHKアナウンサー）の朗読」
- 60、「音研で本を作ろう」
- 61、「モンゴルの踊りと朗読」
- 62、「ストーリーテリング」
- 63、「俳優の朗読」
- 64、「公共の場でのアナウンス」
- 65、「モンゴルの朗読・芸能」
- 66、「園長先生奮闘記」
- 67、「安田登『メリハリ読み』をめぐって」

- 68、「共通語の発音・アクセント考をめぐって」  
 69、「音声表現・藤城特集をめぐって」  
 70、「科学的朗読法―基礎編1」  
 71、「CBC視聴者対応と日本語」  
 72、「鉄道の車内アナウンス」  
 73、「話しことば検定」  
 74、「音声表現の基本『プロミネンス』をめぐって」  
 75、「科学的朗読法―基礎編2」  
 76、「私の朗読法―心得と実演―」

(本学教授)

## 「原発ルネッサンス」の潮流を 逆転させる中越沖地震

村田光平

原発の再評価・促進傾向(原発ルネッサンス)に根拠はない

二〇〇七年七月一六日に発生した中越沖地震は、核の世界に温暖化を口実に原発を促進しようとする「原発ルネッサンス」の動きとは逆方向の新しい潮流を生みつつあると思われる。

同年七月二三日付ロスアンジェルス・タイムズ紙は、次のような指摘を行っています。

「原発ルネッサンス」の潮流を逆転させる中越沖地震

a) 温暖化の対策として原発を有効なものとするためには、今世紀半ばまでに、毎週あるいは隔週に一基ずつ原発を建設していく必要がある、そのためには部品製造すら間に合わず、非現実的である。  
 b) 現存する一〇四基の原発(電力の二〇パーセントを供給)は寿命が近づいており、その代替には四、五か月に一基のペースで今後四〇年間、原発を新設する必要がある。温暖化対策にはとうてい間に合わないであろう。  
 c) 日本の六ヶ所再処理工場から二〇〇kg、英国のセラフィールド再処理工場から三〇kgのプルトニウムが行方不明となっている。六kgのプルトニウムで長崎原爆は作られた。

このような立場は、最近米国の知人(会社社長)から寄せられたような次のようなメッセージと軌を一にしております。

「米国では温暖化対策として原子力を容認するようにとの圧力があります。私はこれに強く反対します。お送りいただいた資料は私の所属するグループの会員に配布いたしました。

エネルギー保存計画も代替エネルギー戦略への財政支援もない状況の下で原子力を擁護することは、倫理的に許されません。ご指摘の核拡散、廃棄物、大災害の可能性は極めて現実的なものです。核燃料が核兵器に転用される危険性は、核拡散とともに高まります。

エネルギー問題は統合されたグローバルな問題であり、国際協力が求められます。だからこそ軍国主義が最大の危険であると信じます。世界平和と全ての核物質の削減のために、ともに力を合わせましょう。」

活発化する「原発不信」の潮流